

鉄鋼ニュース

主要製鉄国にみる昨年の鉄鋼貿易

鉄鋼連盟の調べによると、1957年における主要製鉄国の輸出総計は前年実績を12%上廻り3,000万tの大台に迫っている。前年実績を上廻った国は、米国(38%)、西独(31%)、イタリー(15%)、英国(14%)、オランダで、一方減少している国は日本(20%)、フランス(5%)、ベルギー・ルクセンブルグ(2%)である。フランス、ベル・ルクはその減少率からみてむしろ横這いとみられ、大きく減つたのは独り日本のみといえるわけである。

輸出順位は前年に引き続きベル・ルクが総量の21.1%を占め首位にあるが、第2位は米国が輸出急伸でのし上り、ベル・ルクとの差を4万tにつめている。第3位は前年第4位であつた西独、第4位はフランスが前年の第2位から転落しており、第5位以下は英国、日本、オランダ、イタリーと前年同様の順となつている。

また輸入量は、1955~56年にかけて欧州諸国は内需増大から大巾な輸入増加を見たが、57年にはもとの姿に戻つている。これに反し日本、フランスは前年を大巾に上廻る輸入量を示している。

主要国の鉄鋼輸出を品種別に摘出してその特性を見ると、英、米、西独、イタリーは鋼管の輸出が第1位、フランス、ベル・ルクは条鋼輸出に重点、日本は亜鉛鉄板が首位を占めており、各国鉄鋼業の特色を示している。

国別には、英国は厚板が激減し鋼管、ブリキ、薄板が増加し、米国は各品種全般に伸びたが、特に鋼管、鉄鉄がいちじるしかつた。鋼管はベネズエラ向け、鉄鉄は日本向けによるものである。西独も各品種軒並みに増加したが、中でも鋼管、厚板、鋼塊半成品が目立つ。フランスは鋼管、線材、ブリキおよび二次製品が前年を上廻つたのみで、その他はきわめて低調に推移した。ベル・ルクは全般に減退したが、冷延鋼板が伸びをみせ、前年同国の第5位にあつた熱延フープストリップと入替つて第5位にランクされた。オランダは冷延鋼板、鋼塊半成品、鋼管は増大、鉄鉄、線材などは大巾に減退した。イタリーは各国とも鋼管輸出が増大した中で、同国のみ減退している。このほか棒鋼、型鋼も減退をみせたが、鋼塊、半成品、冷延鋼板、厚板は増加している。日本の輸出は、前年首位にあつた鋼塊半成品の激減ぶりが目立ち、また亜鉛鉄板は第2位から首位に伸び、主要国の輸出品種構成に異彩を放つている。

また主要国における鉄鋼輸入品種の実体をみると、前年は各国とも低加工品のほか加工度の高い製品も大量に輸入する傾向にあつたが、昨年度は加工度の高い製品は勿論のこと、低加工品の輸入もおしなで減少した。しかし日本、オランダはこの傾向に逆行し、双方とも急増を示している。

鉄鋼輸入国を地域別に分類してその特長をみると、オセアニアの16%減を除き、各地域とも輸入量が増大している。増大のいちじるしかつたのは南米州、次いで東南アとなつている。南米州の輸入は前年比120万t増

(59%増)におよぶ驚異的なものであるが、これはベネズエラ(64万t増)、アルゼンチン(33万t増)、ブラジル(9万t増)の輸入増によるもので、この供給国をみると、ベル・ルクの前年比279%増を初めとして各国ともいちじるしい伸びを示しているが、ただ日本のみ90%減と激減している。次いで東南アの増加(80万t増)については、印度(20万t増)、中共、タイ、比島など全般に増加している。中共の輸入量は前年の4.7万tから昨年は12.2万tとなつている。またこの地域への供給国では、日本が総量の23%を占め依然優位をみせているが、ベル・ルクの前年比83%増、米国71%増、西独61%増と各国とも目覚ましいものがあり、今後の輸出競争はますます激しさを加えるであろう。

ソ連に3,000t高炉建設

アメリカソビエト交換協定に基いて、ソビエト鉄鋼プラント見学のための第1回アメリカ使節団の一行は約1カ月にわたる訪ソを終えて帰国したが、その報告によると、ウラル地方のチェリヤビンスク工場では、巨大な日産3,000t高炉が青年共産同盟労働によつて目下建設されているが、彼等はこの建造日数で最短記録を樹立する予定とのことである。

東都製鋼の豊橋新工場

東都製鋼では、豊橋市大崎町旧大崎飛行場跡約16万坪に新工場の建設を進めているが、第1期工事の前期の製鋼工場、埠頭などの建設が着々進み、7月末には30t電気炉1基が据付けられ、8月末までには製鋼工場建家およびあと1基の電気炉の据付を終り、その他付帯工事の完了をまつて11月から鋼塊生産に移る見込みである。

なお前期工事完了後は鋼塊月間7,000t程度を目標に生産を行う予定で、同社本社工場である東京製鋼所に鋼塊を送る。また第1期後期工事である圧延工場は現在のところ明年4月から着工の予定。

八幡の酸素富化試験

八幡製鉄所では、大規模の酸素富化操業を東田第4高炉(公称日産能力500t、最近の実績580t程度)で6月23日から7月2日まで実施したが、1日の出鉄量は700tを超えるという好成績で、酸素富化により2割以上の出鉄量増加が実証された。炉内の酸素比率は24%に高められ、発熱反応は予想以上に活発で、装入物の降下状況は非常によく、コークス比の改善も立証されたようである。

ガンマ線透過装置輸入

日本製鋼所室蘭製作所では、このほどイギリスから、工業用ガンマ線透過装置を輸入した。いままで同所ではX線透過装置を使つていたが、肉厚60mm程度しか透過力なく、これ以上の厚さのものの場合、かなり精度がおちていた。しかしこの装置では肉厚160mm程度まで透過できる。

この装置は長さ20cmのホルダーという鉛棒の先の線源につけたCo⁶⁰のガンマ線を鋼材にあて、この透過状況を鋼材にはりつけたフィルムに感光させる。鋼材内部のキズや溶接の不完全なところでは、ガンマ線の透過量がほかの部分より多いので、真黒な画像の中に白い斑点が残るわけである。このガンマ線は半減期が非常に遅いので人体に危険なため、厚板工場内に高さ3m厚さ0.5mの部厚いコンクリート防壁と内部にも鍍形にコンクリート待避壁を作つてある。